

多様性の中へ

卒業

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご列席の保護者の方々も、よろこばしさとともに、やれやれと、どこかほっとしたところもおありなのではないでしょうか。

今日は、卒業される皆さんに、神戸松蔭女子学院大学という名前をもった大学に結びついた、3つの特徴を順に語ってはなむけの言葉としたいと思います。

女子大としなやかさ

まず、大学名から明らかなように、この神戸松蔭女子学院大学という大学は女子大という特徴をもっています。はじめは、学生が少数の女学校として、124年前にイギリス人の宣教師によって作られ、初代校長のバーケンヘッド女史以来、8代にわたって、30年間女性校長の時代が続ききました。

明治のころの女子教育のはじまりというのは、なぜかNHKが好きなテーマらしく、大河ドラマで取り上げられた、少し前の同志社女子の創設者新島八重に続いて、今期の朝ドラでは日本女子大学校を作った、広岡浅子をモデルに、白岡あさという名前で主人公にした話が続いています。先週末、3月19日によろやく女子のための大学校が創立されました。1901年のこととなります。

ちなみに、松蔭は、女学校として創立されたのは1892年ですが、今のような4年制の大学になったのは、丁度50年前、比較的最近の1966年のことです。短大はそれより少し前の1950年にできました。

さて、朝ドラの「あさが来た」ですが、主人公は大学校を作っただけではなく、銀行や炭鉱、生命保険会社など、手広く手がけています。女が女学校より上の学校に行くということにも世間の大きな偏見があった時代ですから、ましてや、商売の表に立つということには相当な反感があったのかもしれない。

少なくとも、ドラマ化された主人公を見ていると、そんなことも一向に気にせずに、明るく働いているように見えますが、ここで一つ面白いと思うのは、ドラマでの夫の新次郎です。家業の銀行は弟にまかせて、紡績会社の社長についたりもしますが、それも一定の期間の後に退き、相談役という存在になります。遊び人のように見えて、あるいは見せかけて、陰ではいろいろと妻のあさを助けています。いわば「逆内助の功」ですね。

男尊女卑の考え方では、家庭や会社では男がリーダーであり、女はサポーターの役割しか与えられません。それが、このドラマの描く明治の時代に、逆転した関係が示され、それを当人たちが自然に演じているというのは大変面白いと思います。

皆さんは、大学にいる間、大学院の何人かの男子院生を除いては、女子ばかりの中で過ごしてきました。女子大だから当然と言えば当然なのですが、卒業した今となっては、これは、とても貴重な経験だったのだと思ってもらえると思います。

ゼミ活動などでのグループワークや、ボランティア活動、クラブ活動などで、チームとして動くことが何度もあったと思いますが、そんなとき、誰かがリーダーにならないといけな
いとき、もちろん、性別で決めることはできません。同じ人間どうし、一番適した人が選ば
れてきたと思います。そして、それをサポートする側に回るのも、性別という理不尽な理由
でなく、決まっていたと思います。

広岡浅子が女子だけの高等教育機関を作る必要を感じたのは、自分が女だからということ
もあったでしょうが、サポーターに恵まれていた自分に比べて、必ずしもそういう条件に恵
まれない一般の女子には、まず、自立できるだけの力をつけてほしいということがあったか
らだと思います。

「あさが来た」の脚本を書いている大森美香さんが、NHKのサイトでインタビューに答え
て、次のように言っています。

(<http://www.nhk.or.jp/asagakita/special/special3.html>)

…

広岡浅子さんが残した言葉の中に、「みんなが笑って暮らせる世の中をつくるため
には、女性の柔らかな力が大切なのです」という言葉があります。これは、第一次世界
大戦がヨーロッパで始まった頃、だんだん近づいてくる戦争の足音を感じながら、浅
子さんが若い女性たちに伝えた言葉です。

執筆のための題材を探していたときにこのエピソードを知って、まさに今の時代に
ぴったりの言葉なんじゃないかという思いがしました。社会で女性が働くことって、
今でもやはり難しいことがあると思います。でも、男性に負けないように立ち向かっ
ていくというよりは、女性のしなやかさ、柔らかさを活かして能力を発揮することで、
何か新しいものが生まれることもあるんじゃないか。そんなことを、ドラマを見て
くださる女性の方と一緒に、私も思いたいですね。

…

ここで出てきた、「みんなが笑って暮らせる世の中をつくるためには、女性の柔らかな力が
大切なのです」という言葉は、先週の最後の方、ドラマでの日の出女子大学の初めての入
学式でも、白岡あさが言っていました。

ここにある、「しなやかさ」という言葉は、柔らかいけれどもたくましい強さにつながりま
す。機会あるごとに言ってきている、「しなやかにしたたかに」という考え方にもつながりま
す。このような「しなやかさ」はまさに女子大のような環境の方が育ちやすいのではないか
と思います。

目から鱗

次に、大学名からはわからないのですが、キャンパスに入るとまずチャペルが目につくよ
うに、この大学はキリスト教の学校です。この卒業式も礼拝の形をとっておこなっておりま
す。今日は、これに関連して、ある言葉を紹介したいと思います。

先ほどお渡しした学位記、いわゆる卒業証書には、きのうの3月20日付で、皆さんはこ
の大学から卒業（大学院生の場合は修了）したことが書かれています。今日からは、皆さん
の多くは社会人としての第一歩を踏み出したこととなります。

今までも、大学以外の社会を全然知らなかったという人は少ないでしょう。通学時に電車

の中で見たものも社会の一部ですし、アルバイトなどで働いた経験のある人は、それなりに社会の一端を目にしてきていると思います。

しかし、それは、あくまでも、学生の中から見た社会です。自分がその一部となっていない、いわば、外から見た社会。これからは、皆さん自らがその一部となっていくこととなります。

外から見る世界と中から見る世界、その違いにはじめは驚かれるかもしれません。今まで知らなかったことに初めて出会ってびっくりしたり、感心したりすることもいっぱい出てくるでしょう。ドラマの言葉ですが、「びっくりぼん」の続出となります。

そんなときによく「目から鱗」という言い方をします。これはもともと聖書にある言葉で、キリストの弟子たちのおこないを記録した、「使徒言行録」の第9章に出てくる話から来ています。

ここでは、後にキリスト教の重要な伝道者となるパウロが、まだユダヤ教徒でサウロと名乗っていたころの話が語られています。

キリスト教を激しく迫害していたサウロが旅をしていたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らします。倒れて、イエスの「なぜ、わたしを迫害するのか」という声を聞いたサウロは立ち上がりますが、目が見えなくなっています。

3日後にアナニアという弟子がサウロのところに来て、イエスに遣わされて来たと言い、サウロの上に手を置くと、彼の目から「うるこのようなもの」が落ち、元のように目が見えるようになったといえます。

その後、サウロは熱心にキリスト教を普及する側に立ち、パウロという名で聖書の中にも多くの手紙を残しています。イエスにとっては、サウロに有能な伝道者となる可能性を認めて、目が見えなくなるという苛酷な経験をさせて、より強い信仰に目ざめさせるという、一種のショック療法だったのかもしれませんが。

ところで、「うるこのようなもの」というのは何でしょうか。「ののようなもの」という微妙な言い方をしていますが、英語の聖書では fish scale とあり、魚のあの鱗ということになります。ふつう、人間の目には鱗はつきませんが、蛇には目に鱗のようなものがあるそうです。脱皮のときには一緒にとれるらしいので、今度、蛇の抜けがらを見かけたらよく観察してみてください。

もちろん、聖書の「うるこのようなもの」というのは象徴的な存在で、この場合、それまで、3日間サウロは何も見ることができなかったのだから、人間の目を開かせないもの、目をつぶった状態と同じ状態にさせるもの、を指しているのでしょう。視野を極端に狭めるものと考えてもよいかもしれません。

それが「落ちる」ということは、視界を遮っているものが取り除かれ、目が開かれ、物事が見えるようになるということの意味します。はじめて、真実を自分の目で見るようになるということなのです。

今では「目から鱗」というと、単に、新しいことを知る、「なるほど」と合点がいくという程度の意味にも広く使われるようになっていますが、元の意味を考えると、それまで、目が曇って、見えていなかった真実をはじめて知るといふ大事な意味をもっていることのように思えます。

「うるこのようなもの」は、サウロの目を完全に見えなくしてしまいましたが、そこまですらなくても、視野を狭めるもの、あるいは、片寄った見方に誘導するような色眼鏡も、真実を

見極めることを邪魔します。

色眼鏡ははずした方がよいのはもちろんですが、サングラスの場合、それが「度付き」だったら、はずすとかえって見えなくなってしまいます。結局透明の眼鏡をかけ直すことになります。

朝日新聞で毎朝、「折々のことば」というものを紹介している鷲田清一さんは、2月16日に、この「目から鱗が落ちる」を紹介していて、色眼鏡は、外すと視界が開けるが、結局透明の眼鏡にかけ替えただけかもしれない。結局人間には何らかの眼鏡が必要なのではないかという鋭い指摘をしています。

どうでしょうか。よく使う言葉が、そもそも聖書から来ているということ自体がそれこそ「目から鱗」だったでしょうか。せっかくキリスト教の大学で学んだのですから、これからも、「あっ、これも聖書から来た言葉かもしれない」と思ったら、まめに調べてみてください。

そして、目に「うるこのようなもの」が付きそうになったら、注意して、すぐに落としてください。

多様性とマイノリティ

この大学の第3の特徴は、神戸にあるということです。神戸ということが何か特別なことなのかと思う人もいるかもしれませんが、東京とも、あるいは大阪や京都とも違ったよさが神戸にはあります。

まず、自然です。この大学のある神戸市灘区というところは、南で海に面しているだけでなく、北で六甲山と摩耶山という山を含んでいます。アウトドアの好みで海派と山派に分かれることもあるかもしれませんが、神戸ではどちらの要求も満たすことができます。

神戸には異人館や旧居留地といった欧米の文化の名残を感じるところもあれば、南京町のような東洋の文化が根づいたところもあります。もともと、文化的に幅広く受け入れ、多様性の中に街が発展してきたと言えるでしょう。

今日、いろいろな場面で「多様性」の重要性が言われます。ただ、それが、「要するに、いろいろなんだ」で終わってしまっただけではいけないと思います。つまり、「他人は他人、批判はしないけど、自分とは関係ない、関心ももたない」というふうになってしまっただけではいけないのです。

多様性を認めるということは、違いがあるということを知るだけではありません。違いがある他人を認め、一緒に生きていくという形に踏み出さなくてはなりません。

社会に出て、いろいろと、自分とは合わない、という人にも出会うことがあると思います。そんなとき、関わらないようにしよう、というのは、場合によっては賢い生き方かもしれませんが、もしかしたら、大事なものを失なうことにつながるのかもしれない。できれば、違いを認めながらも、一緒に生きることはできないかと考えてほしいのです。

世の中には、いろいろな意味でマイノリティとなる人がいます。マイノリティの価値を認め、広く受け入れていく態度が今求められています。それでこそ、多様性を生かした生き方だと思えます。

今日話してきた3つのこと、女子大という教育機関、日本におけるキリスト教という宗教、神戸という都市のそれぞれも、ある意味ではマイノリティと言えるかもしれません。

でも、ひるがえってみれば、女子大には共学校にない良さがあるし、キリスト教は世界で

はむしろ多数派で普遍的なものだし、神戸は多様性に満ちた都市だし、すべて、考え方次第だと言えると思います。

この考え方をうまくあらわした詩があります。今から5年前の大震災のころに、人々の心をなぐさめてくれた詩です。今日は、最後にこの詩を紹介して、贈る言葉のしめくりとしたいと思います。

私と小鳥と鈴と 金子みすゞ

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を速くは走れない。

私がからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

もう一度、卒業おめでとうございます。

個人的にも、学長としての最後の大きな仕事を終えてほっとしているところです。皆さんと一緒に卒業できることを喜びたいと思います。